

ローズ・マリー・シエルドン著
三津間康幸訳

『ローマとパルティア』

——二大帝国の激突三百年史——

白水社 二〇一三・一二刊

四六 三四二頁 三六〇〇円

本書は紀元前一世紀から紀元後三世紀初頭にかけて、ローマ帝国とパルティア帝国との間で行われた戦争を通史的に描いている。翻訳は三津間康幸氏による。

本書は全一・二章で構成される。序章では先行研究で議論されてきたローマの大戦略について論じる。この大戦略を著者は以下のように定義している。

大戦略とは、軍事・非軍事問わずあらゆる要素を総合する能力を持った国家指導者による政策立案であり、それによって軍事面においても非軍事面においても国益を長期にわたって保持、増進して国家を最良の状態に導くことをめざすものである（二二七頁）。

著者はこうした大戦略に懐疑的であり、続く第二章から第九章にかけてローマとパルティアの戦争を時系列に沿って通観し、前述の大戦略の有無を検証していく。第二章ではスッラ、ルクッルス、ポンペイウス、ガビニウスらによるパルティアとの初期の接触を扱う。第三章ではクラッススの敗北を、第四章ではパルティ

アによるシリア侵攻に視点を移す。第五章は共和政末期の内乱期におけるローマの各勢力とパルティアとの関係を考察する。第七章と第八章ではトラヤヌスの足跡を辿り、中でもメソポタミア侵攻とアルメニア併合に着目する。第九章ではセプティミウス・セウエルスによる二つの作戦を取り上げ、共和政期からの概観を締めめる。

第一〇章以降ではローマとパルティアの戦争を多角的に検証する。第一〇章ではローマ人の情報収集能力を査定し、幾多の欠点を列挙することでローマ人は限定的な情報をもとに動いていたことを明らかにする。第一章では、経済的側面。ローマ人にとつてパルティアとの戦争はその支出に見合う利益、報酬を得ることができたのか問う。そして第二章では結論を述べるとともに現代のイラク戦争について触れ、擱筆している。

著者の主張は明快である。著者は一貫して先行研究が述べるような大戦略はローマには存在せず、長期にわたってローマとパルティアを戦闘状態にせしめたのは皇帝をはじめとする軍事指導者の軍事的功績への強い衝動であったとする。そして軍事指導者がこうした功績を望む背景にはローマのある種の軍国主義的側面を指摘し、戦争への敗北が復讐への原動力となり、失われた威信を取り戻すべくローマ人を戦争へと再び駆り立てたとし、刊行時泥沼化の様相を呈してきていた米国のイラク戦争に対し警鐘を鳴らす。

これまで個別的に議論されてきたローマとパルティアの関係を通史的に記述した本書の功績は大きい。本書は一般書に位置づけ

られるが、丁寧に史料を読み解き積み上げられており、その専門性は高い。また、三津間氏による丁寧な翻訳と工夫（解題、地図作製、註の選定）は好著である本書の価値をさらに高めていると言えよう。幅広い層に推薦したい一冊である。

（阿部 衛）